

ひたぎガハラ

## 001

「儂は、恐ろしいものを見た……」

「ほう。忍さんが恐ろしいだなんて、随分とめずらしいですね。まったく、一体全体どんなことなんですか。あ、これ、いただきますね」

「うむ。オールドファッション『黒みつきなこ』とは、なかなか渋いところを突くのう。よいよい。食べるがよい」

「さすが無駄にお詳しい……」

「無駄とはなんじや。儂はこの怪異業界において、ミスタードーナツとオーディオに関しては誰にも負ける気がせんぞ」

「……業界って……いや、もつと負けないような分野はあると思いますが……で、一体全体どんなことなん

ですか？ その恐ろしい話というのは。あ、饅頭怖い類ですか？」

「たわけが。そんな面倒な、仕込みの必要な話ではないわ！ ま、いつもの我があるじ様と……」

「またですか！ もうあの甘々なイチヤイチャ話もういいかげん飽きましたよ！ 何度も何度も聴かされる側の気持ちもわかってください！ 大体、おかげで私へのセクハラもおざなり気味なんですよ！」

こ、このツータイルの小娘、儂の話を無理矢理遮つた上、マジギレしおった！

「まあ、聞くがよい。それがな、今回はちよつと違ふのじゃ」

「むう、本当ですか？ ですが、どうも恐ろしい話じゃあなさそうですね」

「まあまあ、聞くがよい。ちよつと前に、儂がめずらしく夜更しをしたときの話なんじやがの——」

「忍さんの夜更しということは、お昼ごろですかね」

## 002

今日は押し入れの整理をすることに決めていた。

前から、やろうやろうと思っていたのに、なかなかできなかった。なんだかんだと忙しかったし。

暦はどうも妙に物を溜め込むクセがあるのよね。昔からこうだったかしら？

そんなに広くない私達の部屋。

どうも片付かない。私一人ならこんなことにならないのに――

そういえば暦の実家の部屋は、それなりに小綺麗だったような気がしたけれど……ふふつ、あれはあれで、気をつかったのかしら。

それはそうと――

「そろそろ引越しも考えないとだめかしらね」

思わず独り言。

子供のことも考えると、やっぱりね――

「それにしてもこのガラクタは何なの！ まったく、いつまでたつても――」

なんて文句を言いつつ、私は押し入れの中に上半身を隠すような形で整理をしていた。

奥へと進むほど何故仕舞い込まれているのか、よくわからないものが増えてくる。

古い漫画の単行本、雑誌――うわ、すごいホコリ！掃除器でホコリを吸い取りながら、奥へと進む。

大体この部屋の作りつておかしいのよ。なんで押し入れがこんなに広いのかしら……まあ、便利だけれど。こんなところも暦の趣味なのよねえ。

プラスチックの箱、ダンボール箱、昔使っていた洋服ケース――洋服ケース？　なんでこんな奥に？

「あらあら、こんなところにあったのね。捨てたと思っていたけれど、まだあっただなんて……それにしても懐かしいわ」

それは私のものだった。

私立直江津高校――

私が暦と出会った場所。

「この制服、色々いじつてたのよねー。オシャレにネクタイにしたりして」

まあ、もつとも、いじらざるを得ない状況もあったのだけだ。

――ケースには高校の頃の制服やら何やらが入っていて……懐かしさに負けてしまった私は、いつのまにか中身を全て、床に広げてしまっていた。

「……」

それにしても、かわいいわよね。この制服。

思わず姿見（結婚したときに、お父さんが贈ってくれた）の前に立ち、体に制服を重ねてみる。

「……………」

ふふ、まさかね。

「んー」

いえいえ。

「やつぱりこの頃に比べちゃうと、腰あたりがちよつと気になるわ――」

うえつへつへつへ。とは笑わなかったけれど、暦とは結局こうなっちゃったわね。

別に、私の腰は安産型つてわけじゃないけれど。それにしても――

「うーん……………」

……。

「……………着れるかしら」

ふふ、ま、まさか、この歳で、私が、着るわけなんて、いかないわよね。ふふふ、全く、どんな、萌えシチュエーションよ。

……。

「でも……なんとか、着れそうね」

……。

――まわりに誰も居ないことを確認する。

今、この部屋には私ひとり。

あ、あたりまえよね。

こんなとき、人って意味のない行動をしてしまうものなのね。

——えーと。

——私は、誰も来ないことを確認する。

ひとつひとつ。

確実に——

暦は……帰りは遅くなるって言ってた。

忍ちゃん……この時間、寝てるはず。

神原は……今日は、来ない。

千石ちゃんは……暦が居ないから、来ない。寄りつかない。可愛いのかな。はあ、私、嫌われてるのかしら……

火憐さん、月火さんも、特にイベントが無いし、来ない。

羽川さんも、しばらくは海外のはずだし、八九寺ちゃんは、ま、来ないでしょ。忍ちゃん寝てるし。

——よしっ。

なんだかよくわからない覚悟を完了した私は、玄関の鍵が閉まっていることを確認してから、手に持っていた制服を着てみることにした。床に広げていたシャツやスカートなんかも、ちゃんと、きちんと。

「ん、さすがに、ちよつとキツいところはある……わ、ね。んー、おつと、えー……や、やばい？ いえ、大丈夫。ん……ん？ つしよ。やだやだ！ 入るじゃない！ あ、だめだめ……お、お——入るじゃない！ 入った！」

思わず、私は制服姿でぴよんぴよんと飛び跳ねてしまった！

正直、おしりとか入らないと思ってたから！

ちよつと嬉しくて、はしやいでしたったけれど——ふと、暦に、なんか昔より若くなったよね。とか言われたことを思い出す。

別にそんなことないのに。

よほど出会った頃の印象が強いからね……ま、無理も

ないけれど。あれはやりすぎたと思ってるし、あの頃は……

ま、まあ、いいわよね。今はそれよりも！

「さ、さすがに、胸と腰まわりは、きついわ……ね。い、いえ、大丈夫よ。大丈夫なはず」

お約束のように姿見の前で、くるりと一回転する私。ふわりとスカートが、ちよつと遅れてついてくる。

「ふふ、まだまだいけるわね」

ついなので、文房具を色々と探してしまう。

「われながら、この姿。生き生きしてるわ」

# 003

「といつたありさまじゃった。儂は寝ようと思っていたのじゃが、ちよつと奥の部屋で調べものをしていらの……」

「……」

「……怖いじゃろ？」

「……確かに怖いですね……というか……」

「なんじゃ？」

「……高橋留美子先生は偉大ですね」

「じゃのう。80年代じゃぞ」

「うーん、しかし——この制服コスプレシチュエーションって、元ネタってあるんですかね。わたしの知る限りでは、やはり、めぞん一刻が最初なんです」

「儂もじゃ。そもそも、そのあたりより前の漫画はわからぬがのう」

「まあ漫画とは限りませんが……それにしても、わたしの実年齢でも普通、めぞん一刻なんて知らないですよね」

「じゃのう。む、めぞんといえはじゃ。これはこれで怖い話があるのじゃが……」

「ほうほう」

「——今現在の響子<sup>かんりにん</sup>さんの年齢」

「ひいひい！」

「なんと、五十を越えておる。かつ、儂は一桁多いがの」

「ひいひい！」

「その『ひいひい！』は、どちらにかかつておるのかの」

「も、もちろん前者ですよ！」

「言うておくが、うぬも生きておればそれなりの年齢なのじゃぞ」

「ふふ。永遠のロリボディと綺麗なままの心を持つわたしには、関係のない話です！」

「ま、そのあたりは儂も負けぬがの」

「はあ。阿良々木さんに対して、このロリボディがアドバランだった頃が懐かしいです」

「宣伝するために浮くのか、うぬは。ま、それはともかく、さすがにいつまでもロリボディがアドバンテージとなっておつても、色々とまずいじやろ。こんなご時世じゃしのう」

「ま、それもそうですね。ロリリリさんも、いつまでも

ロリコン野郎というわけにはいきませんよね。ちよつと寂しいですが——しかし、わたし達つて規制されるんですかね」

「本当に規制されるのだとすればじゃが、それは恐ろしい世の中じゃの。ま、なるようにしかなるまい。それよりもロリリリリの件じゃ」

「ロリリリリさんはロリというよりも、ターゲットレンジが異常に広いだけなんですけどね」

「それはそれで問題じゃがのう……」

「で、そのロリリリリさんが帰ってくるんですよ？ お約束としては」

「うむ。それはもう、絵に描いたような光景じやつた——」

「ふむふむ——あ、これ、美味しいですね」

「うむ。オールドファツション『珈琲』<sup>コヒ</sup>じゃの。紅茶のおかわりはどうじゃ？ む、珈琲の方が良いかの？」

「あ、紅茶の方で。すみません、いただきます」

## 004

——カチャカチャ。

カチャン、ガチャリ。

「え？ ちよつと！ なんで玄関の鍵が開くの、え？  
なんで扉が開くの！」

「ただいまー、たつだいまー」

なんで暦そんなにテンション高いのよ！ っていうか、  
今日は遅いつて言つてたじゃない！

「こ、暦！ どうしたのこんなに早く！」

「いやあ、例の用事、キャンセルされちゃつてさあ……」

「きやー！ ちよ、ちよつと待つて」

「えー、どうしたのー」

思わず、さつき制服と一緒に用意した文房具を両手に持つてしまう。気付けば右手にカッターナイフ、左

手にホッチキスを握<sup>にぎ</sup>つてしまつていた私。

待つてくれない暦。つかつかと私の居る部屋に入つてきながら、私の足元から胸元まで暦の視線が移動する。

そして、目が合う。

そして数秒の沈黙と、間——

「せ、センジョーガハラサマ？」

いつぞやのいただけないカタカナ読みとは違う、裏返つた声のカタカナ。滅多に聞けない暦のレアボイス！ いえ！ 今はそんなことよりも……

「あ、あの……そ、掃除をしていたら、せ、制服を見つけてしまつてね……」

ちよつと裏返つた声の私。たぶん、これも、レアボイス。

「す、すすす、すごいな！ ——ちよつと、おしりとか胸がえつちすぎるぞ！」

「そ、そうかしら——」

ちよ、ちよつと暦の目が危ない。思わず目を少しそ



らしてしまふ私。

なんだか、身の危険を感じる――

「動かないで」

反射的に体が動いてしまふ。

今度はしっかりと唇の目を見て。

「いえ、動いてもいいけれど、とても危険よ」

ホツチキスで（さすがにカッターナイフは洒落にならないし）自分の夫を牽制（けんせい）してしまっている女がそこには居た。

ていうか私だった。

――と、とにかく、ここは落ち着いて対処しないと

……

「ひ、ひたぎさん？ あ、危ないよ。危ない……」

「私は――ちよつと待つてと言ったはずよ」

「え、だつて……」

「はあ。あなたの頭に脳味噌が入っていることは確認したけれど私の言葉を理解できないだなんて、ここまですとは思わなかったわね」

「え、ちよ、ちよつと僕悪いことした？ ていうか脳味噌、確認されちゃつてたの？」

「ええ、あなたが寝ているときにそ、おつ、とね。目視で確認したわ」

「……それは猟奇的だな」

「ちなみに、悪いところは存在自体かしら。あなたの存在自体が罪ね」

「酷い言われようだ。あ、でも、それはちよつと格好いいな」

「ええ、だから私はここに居るのよ」

――これは本当の話。

「贖罪（しゅんざい）させてください！」

じりじりと距離を詰めてくる唇が、じゃ、こつ。

「ひいい！」

もちろん、これは威嚇（いかく）のため。

――静かな部屋の中、ホツチキスの針が床に落ちる。あとで拾つておかないと危ないわね……

条件反射は有効だった。今度からお仕置きはこれにしましょう。なんて思いながら暦と対峙する私。

「わ、わかったよ。部屋から出るから。ちよつと出るから、とにかく着替えなよ。な？」

「そ、それでいいのよ。あまりにも聞き分けがないよ。うなら、私も嫌なことをしなければならぬし」

「なんだかノリノリにしか見えないけど……」

「あら、何か言ったかしら？」

「いえいえ！ なんでもございませぬ！」

緊張が解けた空気が——部屋から出ていこうとする暦。

ふう、とりあえずはこれでいいわ。

と、とにかく着替えなきや。

はあ——なんでこんなことになってるのかしら。

はあ……私、何やってるんだろ。

「うえっへっへっへ」

——油断していた。

昔の私なら絶対にこんなことなかったのに。ありえなかったのに——というか、暦に対して油断も何もな

いわよね。

一気に距離を詰められ、なにもできないまま私は抱き締められていた。強く。強すぎるくらいに。

はあ——いつもの暦の得意技。速攻は私の十八番だったのに……。

うそつき。

「もう、しょうがない子ね——いえ、阿良々木くん。私に抱き付くなんて。全く、一体全体どういうつもりなのかしら」

「戦場ヶ原っ！」

懐かしい呼び方をして、強引に口を塞いでくる暦。

もう、そんな呼び方しないって言いたくせに。

うそつき。

——もう、仕方ないわね。

「阿良々木くん。ねえ、暦くん。私、怪異に取り憑かれちゃっているのよ。どうにかしてくれる？」

「ん？」

「あなたという怪異よ」

## 005

「結局、最後はこれですか」

「結局、これじゃのう……じゃがの」

「はい？」

「このプレイ、しばらくの間——というか、今でもハマっておるようじゃ……」

「ひいー！」